弄花　二

屬

花のえん
あふひ
さかき
花ちる里

太政官文庫

和書門 類
特別 三一九五五 號
第十番 函
架
一〇 冊

内閣文庫

番號	和	31955
冊數	10（2）	
函號	特10	5

共十

花宴

巻之名　南殿桜宴事也

此巻ハ紅葉賀次年乃春也　源氏君

十九歳之　花為了春　花宴例　嵯峨

弘仁三於神泉苑有花宴了是始也

南殿花宴例　村上康保二三於南殿有

花宴

花宴之時探題例　延喜十七年　延長

四年二月木例之　は是家ゝ乃例を可用て

此巻によりて書之　花宴有舞楽之例

天暦三三十二五日地下舞人くらゝよ
て堂上の舞ハおかり事と
后春宮のはゝかり揃た右にして
面ゟ東西よりまゐれハあるへし
目いとよく晴て
時節乃景宮中のさまを思ひ居りて
ありへし
其乃あれハ
詩を作る人この事也
多んかん

韻字を一字くさりゆて作るこち作
はるたん題を儒者の宮ではよ古詩を
一字つゝかして各ゝ詩の名句或ハ時
よろしきる句を用ゆ座とりして儒者の
文章れうつよせ壽を中すわると折り
て主上乃御あとに韻字をとらりてな
當叡慮よるゝんを一字御用あるへき故
一勅問し
宸ゝ二わりらいらゝおゝしまして詩を奏
し給ひ給ハ各一字を擇用之作者
十人あれハ五言詩二句を一字づゝ韻あり

今川や十四人乃詩を七言乃二句と申也
花ゑまふ
宰相中将春といふなし
韻字をと探めては各字のよしと申下姓
名何乃字を探りふと名乗之於花
宴に源氏君乃春字を探得たり語る
自然乃幸なる事なりといひける事成
べしこれは後に退木葉乃事に委しく
見えたりと見えたり
年老ゆる人のせとよれ

切者乃あれて脆をぬるしたる何事にも
擬古をはむつきるれをし遍也
春乃鶯をはうといふ舞
春鶯囀也花宴に侍る舞之一名は天長
宝寿楽といふなく可趣よそは舞
あるや
けしきえたり舞語
源氏君はいつ清まれ舞ともみえて
たのおとくちめしさとこれらく
源氏葵上との中れ思ふあやしきあかるまく

柳花苑

上古ハ舞ありけり今ハ絶たりと云々

琴に弾事ハ人ありけり

花宴ニ舞楽ありし例ハ殊ことに堂上

舞人の例ハあるまじきゆへにめづらしきといへり

（落蹲云）大かたに花のえんの事を

源氏の宴のえんにも舞ありて花の宴なり

かりてかくのごとく事をいふ猶又大方なる

まじくハ源氏のうへをさながら思ふものをほのまし

しとや霞たちぬ心をとぢにてきこえあやつの

心えことし

御心の中なりきん事いひては

いふ落蹲の人に詠のよふにつかへあまねき之

さんのくち

（東ニワタリ廊ヲソレヲ細殿ト云）

弘徽殿よ南ハまとよりうる廊あり奥の

北三の戸の事之　一説

ホソ殿ハ北ヨリ戸ニ三アリ南ヨリ三ニアタル

クルシサヒタルニ云々

かやう毋て世中のはやまち

せよ行や隔のまかへりかとをといひすつ之

されとも源氏の心に此のおやまちハ思ひけりとも

はう(りん)しかきし
おもふこと海よりふかき
男女にハ文字なし生としたけれハかハらと
のいふ詞にハあらすして　一説
戸ハたしあてけり
海のハみな人にゆかされさまく
源の自嘆の詞にハ侍しにおそれぬよしを
女よいひ人まふる思の趣也
うき身也に
消なまし草の原まてと思ふよハつきさるかなり

名乗しのへとけらハおもひし給ハ君かまし
きもやとかこらる歌也
おもひりや申し侍りひさらを
名乗し給へといひけるとも侍りとこそあらん
給ひさる也とや
志のれとて
源の心もさなりといひさらせすへき心
と云よりあり
いはまうと
此人ハ江微女の方の人とみて侍れと右大

臣と源とならぬ中なれとも最勝公まつ
けて行かしなるを尊しゆつてにこそ公
家多くつといはひたれ公さしの讓さまかいゆゑ
とと陳しさら公之葉をハ風を出としさん
うしく家をと海しぬおなれたしよそへてよ
めりこさく小葉之
まつりしくおかけるすなくハ
家の公之
扇とらうを
唐よも夫婦の契をよ扇をとれるすきとこと

合歓（かうくわん）の扇なといふなるを
あまたとりくつり　一説
帥
家の小方
蛍無常の事如斯
中くたれわしましけれハ
今東の女を源氏公にいひかけれとも中く
とハ世なれぬよりの公の
まいりのゆゑの名を源氏
右大臣のあかり葵のゆへの名を源氏奥にある
きゝわけ
源の公よ善悪をとしらく分別し給

事なくてやみ　花の宴は南殿にてありける御座

にも但未に遊つかれぬ事を思ひ給へて

其夜も可為拝

後宴の事

此宴をは後宴とぞ申しけるに

又の日出やうまにのりて

も宴の始に右大臣の女御達の気配しつ

御前出つしと思て彼ともあるはなとうつ

花ありて

御前へまゐりて物語ける程に

源の大臣より出のまへ御前の惟光に御かりまうし

てまうすへく

少位少将右大臣の中弁（右馬の頭これ）など

右大臣の息也

いつ君いつ母は尊しあはれ

上の御まつ乳しとなりあへて給ひとあまたあり

姫君わするゝことと思ひ出しのまへ

桜の三へかさね

同じ桧扇の緒三ねつるとはつむと云

三まいかさねてつむまや二枚を別くに

はつむかし　一節

ふ寿くさに
紫まてこく冬とりさる方之
めなれさると川へなかしう
常のおもをと我かさりしうりりちなりしさると之
人の心つらひき思へきさるすこ
屋くらくしにめる数ハなくして
貫河僧正来花乃盛也　只茶上丸廿
哀ね心けりて飛丸
世代をと形人尺待り

年久しく代まはなへさるといふ心之
みとときやしさくま
ほめさる胡之をしえる事をといつとそ之
くりしら志らしめしぶされへさせ給ひ
源のよく知しぶされへ給つ之
すこしなる
新くるむ心へ胡かを出はるへぬとれく中に
上手かとかとる出給つるとや
弟乃事くりハ柳花宮荒人
たみ后くるのるかとかめ給ふ竹つしらし之

御して行つゆくまゝに
ましてたゝ大臣の薨給ましゝハさうてうら代
の両目ちゝきしゝと大やけのゆ方よあり
てあはれつく

弁中ね

たゝ大臣息〳〵或本中中ね弁とある人まや
ちのけら
端命ハ実之ちといへるすけの一本実行家
るすにあおりこて若君の中にれ実あ通く
花とり明〳〵侍く

外のちり形んとやそしつらんきん
本字の仏をほうけるましとをしつるを
りて歩る細く

宮ちのけりる日
江徽殿の服の女御達の右大臣家にて
まつしや

こちりほありやとあらふ世給
右府の字ま神宮の巡をほめさらるかある
をりいハ世の御しまいて字をくへの方〳〵御字ハ
はちすれ実にまつきまう〳〵本いれ仏ハ源氏君

と貴種乃名也
女みこ乃なとをおもひ出つ不なれハ
源氏のとこいの女三宮をたいはらの雨夜れ
くちてのさ夜にハおとつしと源よちくへ
猫乃綱之太宰ハ源と中納言よりつねまとり
すれぬかくすくさあ作おの名之
いふれうしのきみのれなり
花鳥
ありいとなくくひきて
也衣よ下へき引して裾を引のこと之

おほきさみやうし
親王のきさきの御事とハいふにてや見る直衣
姿をといふハ大人の姿とおもふ事也
袖口ちと見えられなり
端ちれ山の出しきぬちとのこともとこうし
一説 めあゆりつけとようしうけれ思ひの事之
袖口とハ簾の下より女房のきぬの袖を
出しくる事之今の代ニも大嘗会など時の儀
式の時ハ出しきぬ乃りて車よりも袖を
いたしたく

扑しうゑなおいともうつてかう
乞焼のさ海ともしつう流之常言気老よ
ものあ
阿つ秀をとられて
石川偏ち某羽をとりて口号阿つ　一勘
石川ハ賀茂名所気ニて
公の阿ろこあしまのは
かく公よ入てうすちしく君を○海とハさう
ましとや
う猿しなよ御う

君達てうハうまつしかれとも女れあてすむ之
おすり乃さ海ハ三一般と思臥公あれ久お
うしといのうしうりそ又源氏の性之
むるた随もちかれ阿つうや女忠れ乃未介の
ちくいれ又公をいはまをおりしろきれ
い時のさ海うまつしかれとも粗阿ちきちて
おふいなうつよ公をこめておうとゆつよ
やくく有感まや

三乃口事　一荅仏徹の東よまうり扇よ

それを細殿と云細殿の出る所に戸二ある
南北二所にある戸なりそれをさし分る戸之
二ハ声に讀へし連歌なとにハ三ツの戸口
と云も在理にハあらす
今案小乃扉と云ハ殿へ出る扉なるへし

葵

是ハ巻名をとりて号せて人乃かさせ給葵なれ
と源氏物語にある給也賀茂の祭礼なりと注
こゝに給也
此巻ハ花宴巻乃後し年乃事より次
年の正月初までの事なり源氏廿二歳より
乃事也花宴巻と此巻との間ニ朱雀院御
譲位と云はれて此即位大嘗会乃事
有へし新定ニ東院御撰ニて可
勘せしむく

世中なりて
桐壺御門の位をさり給ひぬるのち
此弟の尊んにはおさまりたまふや
源氏君大将に任し給ふるによりて是より大
将とよはれけり
栄花物語研九
大将には三位中将宰相にてかけ給ひて大将を
させ給ひ さいしやうの大将ときこえしさひつい
とゆへくいふあり
後二条関白師通 長保四三廿七任参木同
四月三日兼左大将

家にはまさなる家人の此公を
若大臣女御のかたへ
参りはてうひおそらしまし
桐壺御門位をさり給ひて此いと痛さかれに若
壺をうしひおゐりしまいらせし
いま后は
弘徽殿女御の后に立給ひて四朱雀院の
此位につかせ給ひては皇太后宮と申し 花
物ことやの
詑者の細へきことをよみけれはやしまうちきり

東宮に立給しかハ
姉姫の事にて 花散ハ御代に一度立さハ
らせ給ふに 朱雀院位に御座せ給て散文
の卜定ありしと見えたし 此ましより一年後
され年をさき御りうとこの卜定ありて
より三年めにくたりけるにつきし也
人の為あらうゆへしるしとなし
桐御門の源氏にとしつ給おや公之葵上に
六条院息所の物語事に物給しさとに叶へり
女ニ母けなかれ年のほと

六条院息所ハ此時廿九也 源氏廿一なれハ之
此次年御息所三十なれハ いまりことと給
と給り
それによつひ為御さ為に
源氏の公をいふに御息所にもれまし〳〵て源ハ
やにそれそれいけてうらぬとは息所名
しめしくおりむ給ゆ
行ちかの姫君ハ
桃園の式部卿の女也 槿乃名ある帚木まてり
人の給しりや

なくなし奉らせ給ふにも
葵上懐姫のこと
されとも東院をおりゐ給ひて
は斎院ときこえし
后ゝの女三宮の給ね
弘徽殿大后の御腹
御禊のかへさもちかゝとあるさま御ありて
東院御禊のこと　先ト定まりて東河にて
みそきありて後くに初て斎院へ入まし初
斎院とは大内の大膳職式左近府なと

紫野にてまれもて潔斎のまゝおはり其
年の四月に御社へまゐり給ふ人とて参れ前
に吉日を撰ひて御禊のまゝ則紫野
の野宮に入給ふ是を二度のこしひと
いふ女ころまれは御禊は此文へ入給ふ二
度あれ移といへりされは初度のこしい
よ勅使参議一人付奉りて二度の御禊には
大納言中納言参議已下あまた付奉て
近衛次将なしたてまつりとも十二人勅
使も是をすゝめさせ給つとなといへり源氏

大将ハ参議二人中に御坐しられてけれはまてよ
ひつりハ二度乃御供にうつりなりし御后れ御
のうりハけ来しにみへしゝるや　花のよの紋を乃
大方礼もあるや
大将きこし給して
葵上の母宮之
儀をめさし候給て
車乃立所をさ御かたよりまへり
下ゟそれ乃さ御
女房乃御車に八葉乃車をも下ゟそまりを

かく御之
うけに
榻事　一勘　女車にハ榻を用御乃わりくゝ
すれ屋ゆうしんの御あき之みゆるにおりてさしくさ
御あり
御乃く御まに
ひのくまりに致とあての名をひきそいつゝ之
御息所の方をとくふまり給氣色もなきこと
新をとうしにみへしとおかさおりけやと思ふし
てんせうし給之源氏の行とあくまりり

給へりとおほしめしや
新院乃さみかしけりの
御息所の源氏をハ我の兄給へとと源氏を
さもなき事とよあり
大将の御かりれ随身
花 かりそめの義 近衛将監府生
を一人つくりまさしまうしてはへるを
よなり一員ととも地下乃少者の事
蔵人乃うしとハ殿上の蔵人の将監をと云
かれをと具し給ふハ例なき事也 又

引率乃御ちる左右近衛将監将曹ハ本陣に
付さはるによりて 将乃一員にめし具せらるゝも
めつらしきハ此一段の詞かけふ義ともや
花鳥説 此事第一の非義也と 花鳥にいへと
ゑ別によりおほしめしけるにや 口傳云此
物語の寓言乃詳とも申し 源氏大将を
かゝる人によせて此事をかき出し 禅門の說
手をとらへて
手をとりかはしておほむ物し 花 司馬相如か
よしなきり 不可及其儀也

式部の宮さし給ひて

桃園

弥名とハめでたくこそあ給へと

紅葉賀巻にも弘徽殿女御めで給しなと

かくりて是ハ源氏をとりそへてめでたく思

給へし

いかなる君ハとし比宇ならくもなり給

槿姫君の御事　源氏の年来今此宇

え給ふ姫君の御心をもみ御ありもなく給へ

源氏乃めでてささハうしをいそてとまて見ん

えあふまとら給てなれめなまんへ給りとも

かく給へしつかうまつりかなしひなと思ひへきます

なるを御して源氏まへといふ心へされとも

けらくとるおほさぬハ槿乃貞なる志面

しや

なにかてとりもうふおかしけれ人の

た大給れ家風との給へり

東宮乃まうこりとの家よ

花ートト定まて右来つ乃はかさまへ給ふへ

前をきく御事まへく御さことの六条

極文よむへし給ふとや
うたよみのうへのみ給
花鳥ニ云今案童女ハ膝(?)丸時ハ打擣れ
うすハ表擣をもちうるなりんハ寡(?)ハ裏之
よの依(?)ハ上れ擣なとさしひ打擣とい
いふ日ある擣之　一勘
みやことのいくそらし
みちひろしかれとも源氏のさくあれ哉を
よみけり定上部(?)しくおもむきなりし之
あふ哉のはまをおりて

桧扇のえしをおりし給ふや事を手付
多数(?)丸
そうなしや
葵上は何ふと云給ふ人はなになへとよ
紀有則の志ふしを紀けのとふもふの条
の任なとを紀なるなりを紀の志ふしと
よありきれとさいなしとや
志かれうちにる
川(?)家末見可勘
かさしけるたのなりなにおりたゆつ也そうち

人になへてあふひを
源氏内侍におもひかけし哥をよめり八十
氏人によりて数多の人に逢ある人をとよ
みなへり 後撰集にも之府八十氏人の
むかふうけてそ数むかひてふみを
読人不知
くやしくもかさしけるかな
又内侍か哥之
いとはしくねかさしけるそひのあとさましく
しくおほせと

此段いさゝか心得かたし可付心源内侍ハおも
なる人にさかりぬ人をもえらはひ乗のふよ
ろかりて事をとうしかあると
釣も浦海士の
引言
数ならぬ身をとふ浦らく
源氏より六条の息所へ乃斎行の御之
いきてと海
生霊之ことく みなく霊乃あすとも
二条君なとくかりてそ

堂上にさかり給程を人〻知らくて驚たまひし
如く
御はしくと孫たちのこなた給ひ
物気乃神也
院よりもれこもらひ
桐壺帝
はらみよハさ後てもおほしうちさきまり
人乃うらむつ哉百あとうり尺さる事悪さ
事也
手〻溺れ物こひれこ〻ろよ

六條息所のうち
わか心深り給て
御悩はなと殊さままにて百ちとろへ給之
いとゆるしうひめへあるすと
葵上懐姫乃事也
袖ぬるゝおひちとらハ
此方ことによろしう哀けり
山乃井乃名を
川言　河辺しくそ
いふうやとあるせられ

源氏の中也　名處也
袖のしめりやいかにかわくらね
山井まよせける詞也
おほつけゐてやいはれたるを
身つからまいりてみえとも申さぬるを
をとこより給詞也おほろけをもちしぬさけるを
よみ給ふしあれくとや
いはい義にも故父おとゝのはらからかと
六條息所のは霊也　六は息所の父乃大臣也
霊也かと疑ひて

いう義
身をもてゝや
川舟身を捨ていまやさにきん
おりふしをおもとなり
引舟思ひし也ー
高家の去年より入給つりしを
諸司入給ひ人ともゝ
二条ひのはらへ
無官諸司ま入給ひ人とてもゝ文那字にて入
給ひ人とても東河まてはわ物のするを

是を二度のそしへといふや似絆りの別れ
そしへは西河まてまかるとや　花鳥
なきものこほりてさ海を
葵上は霊のかゝりて源氏を打帰りて
涙をこぼしけん
かの貴妃か事ハめくりてをたつねさせたまへん
親子はちきりも一世といひおもふしこれと
ともいなくさあらる頃之
歎侘えよみてる
玉の出あるを結ひとむる事あまたえ

結ひこちよといふうち御心をあか心よみへし
給へところゐまや
後の事又いと心りよわし
産所ほの井とも知らし
すかうしちひとも兼へとに
三ケ来あら来なよのまうりまや
接 らつまこせり 左傳 才二
御中より
髪ゆふ事や　和抄
いとゝ我心かりりをゆきりけり

此恩不知乃事にや
人乃心もあいなかしう
源氏の心也
おとゝのひとり心地して
左大臣一乃事毎にひとりの御なけかれて溢（エイ ミチル）
を欽く理まて葵上乃逝事出来ぬる如く
し此物語ハいたくを此心得也
常よりハめとゝ見て
葵上の源氏を見及給ふましきこと表し
様乃同前

八月之末ハ縣召秋ハ津かさめしといふ不
審也　一説
君なるといひけりけるこそ
大臣乃息なるにて　私説家乃人遊な
ほつ前也
為尊世にかくてある
葵上死去八十四乃事之　喪（葬也）ハ廿日余之
りこうふこと
思乃中痛よふすゝととそ　同心也
文選第十二　郭璞江賦云　神蜧（ヒイ）蝹（ウン）輪（トモコヨイ）

以テ沉ミ遊フ　注云神蟒蛇也　蝹行白ハ
思案りこよふハ多くもいけりく白つヤ　此
悉てて玄子細也　永正七七三済く
又日本紀第二　豊玉姫化為八尋ノ大鰐ワニ
匍匐逶蛇モコヨフ　同文選之公　永正八八九済し
人ひとりかいつまうしと思給ハぬ
人知とりかことハ少彩の上れまく
八月卅日あまりのなのなれて宵れ氣色こと
折りく哀也くて萬の下し　紫ろて別られし
時比ゐ月の事をと思出しけるかそ

ありりあらまうりハそれと
源氏独詠しまそるゝ
小もしめられう
本意れ勝前之名のらに云之
まり何まは薦ふみ哀
恨あことハ物思念あとの定おれしきれと
源とうめれとくさ哭上よ別所し　時比哀
色れうしきるり所ハテ
法華三昧ー
普賢ハ法花よ付ての事作と三昧とて

観音ハ慈悲をと三昧ニ信しあつかふとし
大士ハ菩薩之三十七尊一聚合身普賢
延命大執薩埵
かすみ出る
川の於ひさし　は撰まるをとめてよむ
みかゝて
神のよれ玉
おほ文字の明下為文切なるの仏縁へし
うしと思ひ立つて出し世を
源氏に　うゐかうしとハ夕霧れるよし

時しをゆきと
引寄梅やハ人のゆるへなよ
身にをしみあるのみれ
吹よれて身出もこゝをけの秋風ぞ河海よハ
はるをいはまの寄にてと仏に通し哀
の深うんやようしの浮へさゝ身よさらく
嫁れさ秋風かとをも哀如へ鬼よや
菊のむかし哉くあか
ひらきをさし命の新なりや
ふ春河をと出しめりて

花田にありけれは御しらうの賤者の方へ見ん
紙多く筆をおほしめしかへし
きこえぬほとに
詞
人のよきを喜とこそを
第よと見へつるや
身は海の底に
四郎なるをいひてと思ひよりしはへとと
はた息ツ一事一力ほと思くれのあり
おもかし程へ御よきつれと

也中乃詞
こ兵衛を心さしうんとは
御息所の物云なとしかまへし心をとはの
かしのふく
御徳人をひとやとてこれ共をと　これにては
賤者乃方よりれみあまりてこれ御人せぬまま
とやとてはみよこと思ひをたてあまし
からはきつる詞なりそ
故前坊乃お形しなれとうらう
桐壺御門と前坊と御兄弟なりけれは

詞ナてゐ
かのみやすんところをさして
六条息所前坊の後桐壺帝の内よまゐりし
御さいせんとも称しなりや
野の宮の御かくろへ
詠すより歌文へ入給ふ事也
正月まてハ稀にかゝりおくれ
四十九日まてハこゝかりおくハまゝとも也此清水ハ
川あさしれハうれとと
三位中将

頭中将也
女のいさよひのさやかならさりし
末摘花をはいさよひの月に頭中の源氏を
見つけしかりし 常陸宮その女
妹のことなれと
末摘花より常陸宮よりの後朝に頭中の
源氏をとらへしなりて帰いと頭中るけか
ちかと多く申付し女のつくし此所かやしよ
分別せられたる也へて今もつし
たくはからして

又一説に上の御の同月の事といへるありて
中将君まひなのなりけし
次中ね姉妹の服を十月（服三月）定衣の次によ色を
うすくなして　純色直衣事　至花色
色となり雲とやなりなりまきん
古事　古今集　見河浪
ひもくりを
花色袍形用以之ともなほ純色なるを少し
手はくるひて出衣の入ひもくりをさし
様つは如くへし

あれハ今とこしこ通ゆるなり
軽服三月也定衣あし様ハぬうしや濃な
あハ志乃浅深よてまり
紅のはやへ形の
軽服ニ紅の絹を用ゐる例また見へ花色
下襲の事とみてくもり　花色きぬのまハ
此事
いとうこしれやしなるを
次中いりしと此事あれくえ
なし人の色と成あし

いはむも哀之殊句ニ餘情下思之
枯多落下草のゆかり
〃枯原殊猜也下見之
句をとりてや
夕霧ハ大宮の孫なれハ葵上よりハ次なる
つきに云之大方つれ云之
いふもえてし
一日
垣ねあまたへしハ葵上のなくなりし之
多くの海とゝけれてと
源氏より久しく古代殊ニてみあれの例

のけさりしれみまやとおりへとゝこれみなと門
とにゝしえつし母やゝて杉宮れ付ハまいれなる
面みあまたへ女房をころもけらしとそ御
後人せさしけるゝそれとさみ物とあまたにゐ
なとゝいへり
京のいふしゐ落
色を勝者の用也之
いはをゆるハ
川云
大内山を思ひ出のゆかしなれし

両義ある也 むかしハ大内乃事也 大和物語
大内山ふかくかくれたまひあるへし 一云
亭子院仁和寺の大内山と云所におはし
ましける時 堤中納言兼輔 勅使にてまいりて
白雲の九重にたつ山なれハとよみける
といひて今源氏のさむらひしくこもりたつとて
西ふかきへての物つくりさせ給ひしをと

えらふとて
川の心あそひのつけものを心ハ思ふほと
ともえ云せぬと云也

あやしき事共はしまりてそ見えはへりけるハ
大二乃事を云物かたりへ六条御息所とも物
一条の事をいふ事を思ひよする事と下におはりへ
當詞也

はしめ入しとて
桐壺みかと前坊なとの事をいひての物也
源氏にはしめ一人としてされともこれらハ見
ゆるこそハと也　川の心まてをなし

あそひへしほるまて
六条御息所とれ多くひさいへおほしなやむ

第七

夫ぬ雅ミろ処てくいておりつんと
岩上いまこ実るりをまくわえんしるを
なるみかとのるすく

中納言君
葵二万の女房く
たるまくして
みるれあれ言の公まそ申り
火をとらるめ雅つ旅佛まれ
此詞妙く如見く

何こあ
くり人草色れたる海
萱草色ハ柑子色と大略同し 花色ふ
表し
杉知のはなれ西南打そて引く
此條猶勝るし
そうしひ海ありはつ神ともを
此條南さまれとひ房の下し
廿十九日かとをくか彩乃深りのゑくみやよ
今源氏君の出雅おりかしの衰いて濡つ

らん事かたし妙之
流におほつかなかりぬるハいとらうたし
源氏の詞
おとなしくうちあらはして
流にむせひたる所こと妙之
流石をかしうせさせ給てんと
源氏又中門公をたてしくらの給之
おほしよりまし貴人をも
左大臣の詞之女房達におほせて御心中を
の給ふへし　私名言のまゝとの給ふ

いとあさくなかる人くれ
源氏乃返答之
中くいはハ何をとかめてか
葵上乃れをせし孫ハ沖何の心まてこ孫と
あらしとこたへ之
空蝉乃むすめしなるちらし給
葵上をもてせ給源氏を立出給ある給ハて
空蝉れをわけうしうらとみつか
ありとも
かゝ貴枕御乃紀今哀

長恨歌唐本ニハ多ノく　鴛鴦瓦冷
霜花重　翡翠衾寒誰与共とあり
旧枕古衾とあるハ和本乃義ニやあらむ
なし
私云　古文真宝所載　翡翠衾寒云く
白氏文集第十二唐本ノ勘ニ云　舊枕
故衾誰与共云も叶源氏ニ云く
永正七七三記之
霜の花しろし
私云けれ乃重字く
とあるしとあるを白しと書くへつらめける

耳とよみを
一日の花なるへし
上乃詞ニ柱ふる下葉の中ニつまんとしてあて
しとおとあるし　此の花之と云わり云ハ床夜
を床ニ男子云之　長恨哥の子の云ふ
宮ニ此御人せさせを給て
大宮ニ左府のミせ給之
殿乃おもかし　外給ハもあるやうに
たたかのこと葉のやうにおほしもあつまし
此人をと御り給へ有人おもの給しきをを

人くのいふ事やみ源氏のたさう身ん人を
見そてひとく人くまれ給しるをと云すや
いはまてとや

中宮のれうに
房つけ文御方て
むらひは身せね
川守までをあし
ほ孫な身せハ大うこし
源氏出居之
けるまてとく

以討書云之有し御のかと云公とこあり
むらんのりつれれる
無文の袍ハ表穀冬ハ平絹夏ハ常の袍
れとし冠を無文同云無文冠ヲ称せる
也一巻常の冠ハ有文ノ羅也脹者ハ無文ノ
羅ヲ用之

まれもくとゆくと身けまうし
源氏の公之うは事をこ給よはまてをと蓋
上方よと有りし人くとと尚有り給之
いふみくし有りし

もし海士の釣するや
はゆくさくなりぬて
服衣をとく拾し母や
志くしことくにや也しして
私居並氏
二条院乃門東對なと如くし折や也こなと
しおるや
中将君とい母は何しなとまいり
御ととなりし東對にて はおしさすし粉
かつえ
君なまうり拾とて

源氏乃つかれなくさ
こるころりにとらしきなる
紫上ふうりへまいらせ候まや
かまめくれよ
新枕乃三ケ夜めれりら井乃事ととの
こ南よ
きよふハいはゐくし貴日よ
尚存のまきらりしまいはなるや
日えりして
足を惟光とりあ合て中納言のまくしさ

月とれ移し移りきて申し
秋のこゝハいく川ゝ
家月乃豊日の事とるまはく以ふなり
校定し　源氏さへるをふわ証りしおかれ
めぐ問也
こゝ乃一まそてとあらん
三ヶ一冊てもとよむ候何りと云し
口傳三ヶ大事乃つゝ　口傳在別
むさあ乃弁といふ
少納言か女也

かくこそんこ
ほかしこあかさかといつは（かさいちとり不用し）
人とよ志てもれと云ふく
あさなの事ハまさをうハね
りうさしとや
さてしるうきりのく
近て渉りしまつるくる
東をやゐてそんと
川合の若草れ新年税と
いま后ハみそしけよ

勝月秋の連歌に如侍之云く
一勘云 大臣の女なりし藏人
いとふかしとおもひ出侍るに
弘后のちかへ
君をたのみてのさ海にハ
源氏の公
あまたハ海さしぬ
川云
年をへたりぬ
源氏次二幕に如侍

みそらけ
ゆきそらけし
まやきぬのとも
川云 ゆつし（麻行）北山云 わ宿ともしなめ哉
猿の公をよれ侍之云く 只春の始に見てま
いせんの公のりそをまへ書き
わおとくの北迷（里）
奥平親王 宇治関白霊気に出侍る事

栄花物語第十二まきに
ゆくゑしれぬ公事しひに
源氏君のこれ床をおくられ出るこゝろ公
なひに亡魂をおつ返し

賢木
巻名以詞及歌為巻名也
斎宮乃御くたりちかうなり
斎宮群行九月十六日於参京事也
河
おやそひてくたり給例ことになけれと
此事例なしといへとその時の事をとる
して事なれくさかへは安例とも円融院
御時村上乃御女親王斎宮にて下給時
母乃徽子（重明親王女）女御乃そひてくたり給

事有り　見河　此時なしめたるを云例
と書く
人の浅き形しとおりよ
源氏の子の種を以まとさしとて御息所
乃心く
りとの殿よハ
六条京極家よくれ息所をよろしくおよ
よりもみや
御して狭へなれよみよ
冊子の事

浣乃う一乳いなし次
此事ま下に崩し狭へ来れ氣乃たこり
とある
九月七日そうりなれしえ
十六日群りちう参し時宸文えん分
當へし
いてやとおかしまつひあうう
川の歌を思ふといふくおうりよと
みり家よ家え
此の事も白えく

斎宮女御か哥ニ琴の音に峰の
松風かよふらしとよみ給ひしをひきて
の事也公通卿
こと葉を大かたは
延喜式大嘗会の垣をは柴とかこふとこそ
東宮も是に准すへし 花鳥
かしくし柴
柴こし 紀之
ひたきや
火焼(ヒタキ)の小子(ワラハ)二人をき 延喜式 花鳥に 今は神作か

とこそしるし哥之 云々 又東宮ともあり
哥用不分明也
かやりのけり哉を
源氏の詞
つのおかさん事を
東宮れは公をといふ
かくしぬ色をとゝまるまて
榊の名によそへてのみ也
いろ哉をとを
大宮人のこゝほしさひれ公如本

神垣を
休息所乃哥之由とりて拾遺ニ作之
志らし乃枕とハ
君によつ義志らしをなき物をとことへまう
房ハ三輪乃山のりよの哥いふ小絵ありんなと
乃哥の心よそしよあるもいふ小倚りへてといふ心
多くてやおとの心也
し女子ハ
梅花乃香をとうりしことをあてられハの哥を
もてよめり

人をまてしさ待よおほし
休息所乃事也
きしありて
秋乃哥ニ成就しまる也
月を入ある由也
上詞ニ夕月夜とをよりしまかへり
暁乃まうれハ
源氏の哥
行事を人よりも我
世乃人のとしへとおへき詞也

長奉送使

御前と　勅使とハ河原まて供奉也　長
奉送使ハ伊勢まて随奉之　花鳥ニ参
まいり乃津義をぬ事ともを
此息所乃御事つゝをさぬくあるまし
くけまくをあましこつ記
斎宮へつゝかきて申さんをおそれあるまことを
乃ゑ之
あり并ニにつそ
河原ゆみゆうろしの二乃公をとをてれ

於也亭丹只んてくり
とにはゝ并
地祇と書之　山祇と申てハ宮河川み也
續之うくハ拠名之　東宮亭

女別當

斎宮別當之　一勘令の母ひを院宮関白
家子とよお当房とて在之
津まへく丹なりめぬ於つり
二条院まやこち此れさ海をと不思
御やしおとれくし義を

弁家は此西寺の仏をおとろへしとや
くしま相倒に多く此くをひて
源氏の仏めい家しまこと
多いめし此国しをきをんをし
東方は源氏のうしろを頼しや
此息家こうしに祭縁
弁文乃いともおくおうしまひ此御乳母い
多条まて此幽はれ家や今弁家八十四
よ知縁へともに母御息家をひ縁へハ同幽ゟ
て内へまいり縁へ幼き比行幸の同例お

飛鳥に安
ちておとし乃
此息所の父大臣ゟ給へ
然ありて
御息所乃事や
うれしきを給ハりまして
此息所此仏中に詠し縁や
葉坊へ
此息所のまいり縁し　年八十六才となり
去年　源氏ハ八歳なりし　此息所然れ

年源氏十二也　前坊ハ朱雀院乃立坊
よりかの東宮にておハせし如くなるへし
保明太子小一条院なとの例也　花鳥
よりれ乃らしまり給
天皇大極殿高御座の東乃御座にて
昌に入らる御椅子にのせ給ふ新王乳額
まいりて京乃一方に於とむ貴にあなと作
事ある花鳥によらしき儀式給也
八省にあてはしまする
大極殿をハ八省院といふなる八省なと

八省乃本院なる故也　出車ハ八省乃東給
まいりてはしらし給也
くらし出給て
此乃時内へまいりのふとさらししたる御
座り
こゝの入れ大路と
西洞院とも東洞院ともいふへし　花鳥
路次ハ桃花鳥に出
新宮下向乃事　一勅さうりおましくし
代乃くちあとに立ちうり給へるまつ之ゆかの

東宮まては八歳アや宮の女御乃なとゝいこ
の中のうへおはしましみかとハかゝ
せ給へと御沈まゐおはし村上中の宮や
おもしまし選子内親王御うへ不和候
事　私勘之　栄花第三
いとおかしき事をとをこしろへ給ひてましく
御息所の御事哀にも我しともうせをと思ふ
きとし給へ給也
東宮はいつかりて
おほうら御事の東宮に思ひ立也

東宮の事をば
此詞まうけの君
何事もまうけ給ふと
東宮といふも我らおはしませば御事哀也
此宮の御うしろをも給ふよ
東宮なり
大后を
おほきさいの皇太后宮
中宮の事
入内後も中宮と申すなり　立例

まつ御世の松おしらうことしにて
位をさえし世継しかゆつり　嵯峨天皇
例や後しの代にハ中納言
おかまりなく
右大臣任太政大臣之たゝ人にてなえての御花
高こけり又おかちおとく
又さ海しの流ほとしおほかり
紫上夕霧の宮せん
むかし源氏の後
なくなるあとの事也

宮た三条の宮に
前左筆ウ文前後和の兄弟也
けむ広こ多なうし松や
説よ松をさとつてよかり　松やうれをまん
と大やけよりそおは御也
何まりつくしきりそ
河海の冷之高前乃思ひのまゝなりまて
おもりれとらしつしてとて也　されとも河し
河うりて哀なるもや　水乃面よ志津く花
乃色の哥侍りるとや

それ次に
訛者第也
少将宮ハ
三条宮あり
年久しうまかれと
源氏廿三巻なる也
御門のまうり
二条院の事
この西のかたろ
三ケ所つゝ

院の御思ひよやうて后に御給つる
院の御おもひ人にや雅とゝをあり
后ある里うちに
弘太后之 梅壺をきうしとし給之
こゝ花てんの
朧月夜登花殿によれ召しゝ弘徽殿に
うはり給てゝ
思ひのおなりし事ととをと
源氏の密通事
女姫君をひきよせて

蒼上朱雀よりれきし批ミしを源氏に
定のよろしく
大臣の御中もを
たと右とのおとゝの中悪く
かきりなきされ横様え乃ゆまり
源氏を須の浦ニめしかしむれるなと云
むらひくし
當腹や
ゐつらりよ
大かるふいつり又住吉の御縁南殺足ふ

東院ハ御かくれて
蒼東宮の后腹の女三宮の御おしとてを承院
事や　一動桐壺院ハ桐壺帝乃御おいた
それハ聖服そて七日乃服三日のいと海れ
て絹もて日粉いるとゝきや
孫王乃后殺例
花しを必皇女の御殺つきまや
中將よとゝのまへ
桂宮乃女御へ
はよ夢一所おりしまさぬ

かよひ給ふ方なりまては不知けるや

中納言
朧月の方乃女房
我名をしらする人ハま
源氏乃さ海をいふ
毎ゝ愛母しをこれ為とさいつゐ
どの弁との時よとハうなゝるや同しき　一勘
今案宿直との乃近衛ハ其頃大将次将乃
間にとの弁から上首乃人をさしてとのとの
物語毋いつ陰ハを諸つらのうらべてうち非

母つ阿ゝしんす乳をと宿直との乃近衛々人
まをもしつらされてこれまいりまてハしをそつける
をと大将ハうちえりて少まかゝこのれまかはで
まつりしきとハ書持之ごて一とのハ近衛
乃との弁とのは此時源氏も右大将也　又云
次の将よ名つきる事なりのよ近衛次将乃
乃しぬれゆうし侍人れ源氏乃くらわの頭
へ阿事まかつらんとてちをへるしへおこ
ゟがまやと源氏のまかいをいさ　一勘
源氏乃小弟まハくらぬなるあれしとこゝろ

しくことなる也
むすほゝれつゝ成
胸のあくとくまゐらするなどとかへりこ
兼香殿
当今 朱雀女御 今上の御母也
ひさね
舞黒の方之
りてくるまはれなるくみの
夜臺なり
明果はまれと出給ふは

源氏かへらせたまふよほどまゐらせ給之
宮乃大夫
中宮大夫之
猶いとくるしくこそはべれ
夜臺の詞
そうしねむごろのたるを云ふ給ふ心ちし給
御上をと見人時夜臺の廻しさとせるくさ
むつきるをと見給也
めくりまはゐるらして
王命婦と弁とな也

世中にはかりとさこうしめされんとも
源氏乃釣
はかり事れ
源氏の為之やてうせ給りけんとも給とめし
釣をとこそよめり
これほとしにをこそと
なる義よの恨ちと
人よもとは菊つねの身よ源氏の恨ちとのこして
をともやるをはかりと源氏ミうらミ給へしと
讀のすへや

世にしられて
男女の習れ忠乃誤名ちをあらしてんと云
心よその給へき
この女君
楚上
大后乃はかりし給ふよの給
菊臺の中宮よ如給しけるを弘徽殿乃
う給ミ給之
威丈人のかたきんかれやうよ
史記文　史所　世界ふ人のうしきめきとかし

猶たかくともへまつられたる事必ある
ししとそ
宮はいつしうさまくしう
東宮の事
内親王せて久しうらん
散華詞
さる梅ヶ壺の母や
式部とはをさかる女の事とそれる事よ母后
の御おほんとと思ひての起之
女にて見ゑ事の侍りしう

東宮事 女御なりして見ゑ事の有やと之
雲林院
淳和離宮也 天原うつもん院ともよむ
御母なりと聞れはせらしこ
桐壺更衣の御事をとしく也
う歌人しとそ
り許 天乃戸へと
りえ御まえへしやと
世をつまえ有れ由之
きくさしたは

はなみの盛なし
みちのくなるは
檀紙とて志ろくてあつき紙之
いふなれ
源氏の志川公なきさと云之覚よよ書く
よあり
凡物はまいりてみえて
浅茅か露よりて隠さくにおもの折を女
君乃袖身よ分と人隠絶へり分ちら心未
の詞なる也

中将君よ
槿斎院の女房之
ふけ侍くハ
懐旧のつらさにいひとあまれとしむかしおか
ゆかれぬ心之槿なり好きとせしるかはま
え秋の縁かかうしや今ハ亡後までも
なりけれ之
むかしを今よ
引なれし面れ給のあくて書紀
とらへんさ行ん地の届よよ

判云　取久へ臣御本を　公右無住ニ多ら
許ハあさきハ浅りとも左も勘物しるす
仍まつれハ
東院よりハ中々まつき也
そのこと也
源氏の云を何となくうけてよみ給ケリ昔
お源氏のとゞろきて
ちり衰世ひとそ給り
川云未見
御して初ろかを

新古事をとりてより
おろうしや
哥事乃悍也
如やしう歌しの初と
東宮無院いはまとをおきしやうに公也
なりの事の哥しきに悍所の事あれハ歌を
うらうしう云ふとよ
院をつくなくて云ね
無院の心之
人ひとりの御中

紫上事
そしうるい人
紫かとこそはいふしか人なれも文献古人
ともを
くろきは車
賤者車也　西宮抄ニ童賤ニ紫黒
是耳
世中いつはりんと
當代よなりて源氏の時よりはしめ給はぬかす
をとこつかふ也

あいなき公の
源氏の御しつらひ給ふ
宮よりいつせ給
前坊無中宮へて
いつせ給ひけるを
弘乃詞也　中宮の東宮におはしましれ
事也
目
かなてと公事しけるやとて
日数をとゆりて出んは公事ある事しとや
いし事くらし

引哥よみの出し給の公よそれ給へるも
給てしおもひ出の心をかし給ふの御ゆかり
なりしと
源氏の事をとの給之御ゆかりなる事不忘思
ひ出りをなき心也御ゆかりのことを用之
宮の御事ゆかりなる事
東宮の御事とも中宮をも御覧ずるを
おもふ之
御そ給へる目とまりける給へるを
中宮の三条宮へ御参内の日源氏参給之

中宮のおもひの御ことにおもふ
御座所の席に御て給ひて不二給ふとて
先に出し給之
春宮とは今の御事也
朱雀院の御時朱雀院の御事に似させ給御遺
言ありしとや
大宮の御せうしと
弘徽殿の兄弟也
まいけいてん
朱雀院の女御に参給

白虹月をはらぬもり
漢書又河當今をとくろふきん白虹とや
太子のいらう
れう帝て
月の都やらなりのよ
上詞なる九月やくしとをこし秋の深方
よるなりけり
九重のよ雲や見ゆる
中宮の事
月影也

此亭両客中宮九重のをとらけて月の事と
見せてり下りて源氏の君ひとよ給へる也
須磨のうつりをとまり
露も人乃と
此亭山桜たるまりたと
菊あとをふくとに
朧月ハ女とられけん花宴の巻也
きこえさせしと
源氏物語
身のおきところなしとに

月言撫子ゑね河之
ものゝふなしは
人ことは色なきにかはるや苗を源も
ともにこそみめ　花鳥　作者同不及哥
也
御八講乃いふ哉
中宮れまうちとくの据つ前公さしや
宮よ申し据
中宮之
まつれかし

ゆきはふとは常にふりてけり
まちかりし梅のしうへはゆきかねと
わかあをる詞之万乃すゞ常乃やうにてよみ
しきちとなとれ
十二月十よ日
中宮れ御八講之内し中宮れ八講ハ毎年
定ることの一部つゝ定めの法
あはうちにみる可哥
ちよのかり
竹を貫にはこて経をとゆるし之

文帝乃御まつり
中宮の文つかさ
常におこなふ事の品々を書しと
記者の役也
五未乃日
あらんの日とよむ也　一説
みこなつハ乃程に当りて
中宮御殿の麹を出ておしとの前へ亞
申也
御とらのよ川の傍款

中宮乃ゆへをもちて
いふえらしめておりひめの所に乳ぬつく
以詞を稲掛之こくまうりかなへく
候也
名香のきよりを
中宮の名香を焼のよすゝめてはるかの
くらぬ也
此ゆまさを通へて
中宮のゆゑ之所をわたく
月乃むし

源氏之雲井をかけて禁中の事なと
かきて中宮の出家し給ひて忉利天
上なとの事なと此の世の念なとなと本意
事也
ほかのことはつけては
此外又無雲之下向なと哀之なき人の雲
の八重と河山の行状しなと此續
とかかり給へかと
川外不見又言此公事あれとも
取用へき詞あるへし

二条院也
かれは位をても
中宮事く辞退し給ひんと也
くわしくいひはべらんよ
記者の義也
年をかりぬまきと
源氏共中絶す成ぬへし
さらさらり花やかに
古詠の見れるたる也
内宴

むつかりし ことゝおもハれて
源氏のけさうふれ事也
宮乃内れとらに
三条宮乃あり
何とゐるなりて
白馬中宮へ行事也
むかひ乃おかいのよ
大将殿ハ二条れおとゝ乃むすめ 三条宮よ
又むかひとうけ給へ 別の子細なし 一任
大殿ともまうす成也

此人心ありと
何家撰 当世中
云し也
うらしほと 讀る人ハ源氏の松か浦とう
歌てよめり 松からしまの心とやめる
しけ事也
はなさめし
秋也
春除目也
大かれ兵衛理（タウハリノカミ）までも 宮乃れきんかりふてそ
言男ととりて 加階ともへ年 男と云

又の御あかりとハ三宮乃年爵をいへ
里にれ御給を同事也
いはしかとハ御位をとをさりて三宮なとにれらの
一義にをゆるさぬを
御封なとも不可随也入道して後入道の
又しり一歳公私可勤
故御仏事なとものあはれしも
中宮乃大夫之
はじめ人とも
源氏の方の人々

ちしの表奉り給
致仕例　右為家ある　七十三のとしのへ
いはいとくいとをそくの
二条大臣一部之
御子ともハいはまことともなく
右大臣息なれてある之
はかひれはゆるされしいとのまつ
三位中将之
春宮乃御後見
同上　源氏をとこなしい給よりし也　宣旨ある

此事共や是ハ源氏名をことゝなひ給之
一勘 禁中なとにハ宗なかうかく
かんかへ義
見付に
此并丹右御けにまいり
三位中納言之
中将乃御子なれともしけしゆへて
紅梅右大臣之
争のさこともいつして
催馬楽

此ハまし給をさゆりてれ
言弘乃字のまれ給
それをとけさひしけるに
中納言 薔薇をとみてよめりこしいふ
よけさひしもてるとよめるハ古今ノ物名
中ニまさしひを家ハけ此しひかもみつる
とよめるにハ同ことをりて德るにやこそ源氏の字に
同し花鳥に言弘の字をとりきまりとこそ
此しと秋らしうしくきこうしゆしなひを
三位中納れ源氏よ酒をと起すに丹まいつ

よの卿也
あはれなりし事どもを
説者詞也
はかなきいさめ
何書よりもかやうの事しるしたる事ども
一部
多く侍
うつくしき所どもかゝる花鳥の筆
文王の子
史記文　見河海　源氏の身を周公旦に

何ての縁詞也すこしをかしき所もや
成王に何とら
紀氏の詞也　家にてハ冷泉院を成王に
何してハいつり　花の宴にハ武王ハ子也
此物語にハ冷泉院を朱雀の弟と
多く侍とや
帥宮を
菅原卿也
これらの人多し
二条太后云事也

中将の宮のおはしけるを
中務卿ハ二条太后息也
母ハかみをとりてあまになりては
弘后なりて
家をはとも給はさりてなさりつ
橿家なり
これをは坊まて
朱雀の東まておはしける時のまゝ
みかとの御うたにたれは公に任給ありし
源氏まへしれんにも世のみとくる給之

うちのほいなふさ海まてこそ
内侍の督をと女御母をと思ひしなと
ゆかりおはしけるなりし人のたか所にも
人の家の所をも作給之
志并て家の所へ入方になるへき事のかたにそれは
おもつ給へ
世間の人の申あつと思ひしる事之

御封
同云封戸の戸と云ハいつ持の事なりや

一郡戸ハ民戸之千戸ノ百戸ノと云ハ民戸と
なせし所也これも封戸とも云也

花散里

巻名哥によりて号也
此君ハ源氏の中人なる五月の事也賢
木の巻乃末と同し夏の事なりそれハ六月
ころまでの事なるや夕立の比とある
ほとゝきすしくれと
白虹日を貫きといひし事なと
なる也
きいけい殿
桐壺帝女御へむかひける里の事にそん女

給也
多く也みゆし
此家非ともなし　源氏の孫て無侍し
人知し此段又此世の事かひよう事を存やし
若紫巻の詞りるゝ義とうさし　時
のたくひ也なやし
時為おとふ相す
源氏のうとうりし故之給かれ行の所を
よあり
うろし　恒孫りとめて出つると

引哥　荒菊し庭の楯を荊りかひて
うつしうきねを之そえ几りの荊　惟之
をゑとりう浴仏よいつり
孫つしを哀ルを
惟之う空おほましうるを　女孔孫つしも
之うこ　此川宗よく叶つり
此見れ月さし出浴経末寺すり
有月の比在らの庭れさ海との今はし
および海をうく事ゝも　救うつ事しを
右事よりくさみくむう那しさを　救いふ

かゝ也
ちとせはへむつるの
いとゝうれしきあまれと

日本政府図書

紙數六拾九枚
内閣文庫
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan